
魔法少女リリカルなのは-angel

みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは - angel

【Nコード】

N4418T

【作者名】

みりん

【あらすじ】

ある国を追われ、逃げ出したカイたち。逃げる途中で色々あって、着いた先はなんと、別次元の星、地球だった！地球で起こる事件を経るごとに、カイ達は自分たちを地球に送った、張本人を、見つけ出して……。

初めてなので、何かあったら、アドバイスを願います。訂正します。あと、投稿は不定期です。

？原作キャラの性格が少々変わっている場合がございます。そっい

う類の事がお嫌いでしたら、閲覧は控えた方がよろしいかと思いま
す。

第ゼロ話 逃走（前書き）

はじめまして、みりんです。小説を書くのは初めてなので、面白くないとは思いますが、読んでいただけると幸いです。

あと、何かありましたら、意見や感想などをお寄せ下さい。

では、魔法少女リリカルなのは `angge1` 始めましょう。

第ゼロ話 逃走

????? side

ここは、ある国の首都から離れた砂漠地帯。俺たちはその国を追われ、追手から逃げていた。今、俺たちは砂漠に点在している巨大な岩の物陰に隠れ、結界を張っている。

????「はあ、はあ、はあ。ゼロ、現在の位置は分かるか？」

正直、俺は疲労で距離感覚がつかめなくなっていた。

ゼロ「詳しい位置は分かりませんが、首都から5kmほど離れている事は、確かですよ、カイ。」

カイ「そうか。ありがと。まあ！それくらいの事確認しときなさいよ、カス。」うるせー！ハム野郎！」

俺の融合機がいらいらしながら、口をはさんだ。

ハム?「自業自得でしょ！それより、誰が燻製肉よ！せめて、ハクって呼びなさいよ！」

それに突っ込む1機のデバイス。

***「二人とも、うるさい。追手に見つかったら、どうする。」
確かに、その通りだ。現に、みつきりそうな気がしてきた。俺は、生まれつき勘がいい。

カイ&ハク「すみません。インフ様。」

こんなやりとりをしていたからなのか、結界が感知されたのか、追手に見つかってしまった。

追手たち「いたぞー！あそこだー！」

インフ「ほらな。」

インフが言った。しかし、感情表現が乏しいため、誇らしげには
いえない。

カイ「ゼロ、ストームブレイカ で軽くふっ飛ばせるか？」

ゼロ「むりですね。相手が多すぎますし、もう囲まれてますよ。」
だろうな。そんなに、簡単に逃がしてくれるはずがない。

カイ「今は残存魔力もおおくねえし。こうなったら、てん「2つ先
の都市ぐらいまで、転送しか無いよね！」こらー！セリフとるなー
！」

また、割り込まれた。そろそろ、イライラしてきた。

インフ「なら、転送準備に取り掛かる。」

(効果音)ずこっ！

ハク&ゼロ「スル？(ですか・・・)」

というより、空気が読めないんだろう。俺とは、いつもの事だ。

「ふふふ。」

その時、岩の上から少女の声がした。しかし、同時に砲撃が当たっ
たため、砂埃で誰かがわからない。

少女「ふふふ。転送なら、もっと面白い場所にしてさしあげますわ。
ハーデス！」

ハーデス「了解。転送魔法のデータ書き換え。転送先・・・地球。」

何か言っているようだが、距離がありすぎて上手く聞き取れない。

ゼロ&インフ「転送先が、書き換えられました！衝撃に備えてください。」

カイ「何だつて！」

そして次の瞬間、俺達は転送されていた。俺たちはどこへいくのか、それはあの少女の笑い声だけが知っているのかもしれない。

カ イ s i d e O F F

第ゼロ話 逃走（後書き）

みりん「第ゼロ話、終わった！記念すべき初投稿じゃ・・・ぐえふ！」

カイ「何が、「終わった」だ！こんの糞作者！半分漫才みたいなものじゃねーか！それに、ガンダムWのネタとか、少し入ってる！」

みりん「えっ、そんなことn「カイの言ってる事はあつてると思います。」ゼロまで」。でも、次は頑張る。そして、ガンダムとかのネタは、使わないとすぐに、ネタが尽きる。でも、なるべく、使わないようにしよう。」

カイ「ほお。それは良い事だが、次はキャラ紹介じゃあ無かったっけか？糞作者さん。」

みりん「う。ぼろくそ言われてるけど、その通りだから、言い返せない。」

ゼロ「という訳で、次はキャラ紹介です。その次から、本編に入ります。」

カイ&みりん「あつ、言われた！」

キャラクター紹介（前書き）

キャラ紹介です。見ておいて、損はないと思います。

キャラクター紹介

カイ（本名カマイス・アンダール）

デバイスのゼロとインフ、融合機であるハクのマスター。基本的に仲間思いで、生まれつき勘は鋭い。魔力ランクはSS+以上。年齢は10歳と

若い、幼い時から訓練をしているので技術はかなり高い。しかし、極端に

感情的になると制御がきかなくなる。カスと呼ばれると怒る。

ハク（本名ハクイム）

前述通り、カイの融合機。融合機ではあるが、魔力はありランクはAA+

ぐらい。カイがめつたにユニゾンをしないため、多少の戦闘ならできる。回復魔法

や出力制御などは得意だが、戦闘は護身程度。なので、普段はバツクアップを務め

る。ハムと言われたり、男の名前みたいといわれると、怒る。

ゼロ（正式名称・エンジェルデバイスPARTゼロ・エンジェルフレーム）

前述通り、カイのデバイスのうちの1機。単体でも使用できるが、基本2機一緒に

使用する。（セットアップ・クロスという）詳しい事は分からないが剣の形状をして

おり、性能はかなり高い。インフとは仲が良く、AIの性別が女のせい、カップルに

見える事もあるらしい……。基本怒らない。待機状態は、羽の形のブローチで、デ

バイス状態の時は、剣の柄の真ん中ぐらいに立方体の形で埋め込まれていて、色は純白。

インフ（正式名称・補助型エンジェルデバイスTYPEインフィニット）

前述通り、カイのデバイスの1機だが、ゼロとは違い、補助型なので単体では使用

できない。しかし、セットアップした後は通常のデバイスと同じく、武器になる。ち

なみに、銃の形状をしている。AIの性別は男で、ゼロとは気が合う。あまり、感情が

表に出ない。よって、周りからは喜怒哀楽がよくわからない。ただし、ゼ口は分かる

らしい。待機状態は、深い黒のクリスタルの形のキーホルダー。デバイス状態の時は、

銃身の手前部分に、正八面体の形で埋め込まれていて、色は深い黒。

すみません。ここから下はしばらく、出番は御座いません。

謎の少女（本名・・不詳）

今のところ、何も分からない少女。ただし、口ぶりからして性別は女。お嬢様など

の高い身分で、カイ達のことを知っているらしい。

ハーデス（正式名称・・不詳）

こちらにも、何も分からない。しかし、謎の少女のデバイスであることは間違いない。

追手達

こちらは、おそろくカイがいた国の兵士たち（デバイス持ち）

キャラクター紹介（後書き）

みりん「次回から、ついに本編スタート！」

第1話 発見（前書き）

なのは「一人の少年が地球に来た時、すべての運命が動きだす。

『魔法少女リリカルなのはa n g e l』始まります。

第1話 発見

なのはside

私は高町なのは。普通の、小学3年生！だったんですが・・・先ほど確保した、しゃべるフェレット君に魔法使いになってって、頼まれて魔法使いになっちゃいました。それで、怪物を倒してジュエルシードっていう宝石を封印したところです。

なのは「あつ、あれ？終わったの？」

ユーノ「はい。あなたのおかげで・・・ありがとう。」

あれ？フェレット君が倒れちゃった。酷いけがだったから、無理して疲れたのなあ。

なのは「ちょっと！大丈夫？ねえ！（しばらくの沈黙の後）もっ、もしかして私、ここにいたら大変、あれなのは・・・とっ、とりあえず、ごめんなさい！」

私は、そこから逃げ出した。そして、しばらくして公園に着いた。公園の前をパトカーが通っているけど、気にしない方がいいと思う。

なのは「はあ、はあ、はあ。」

ユーノ「すみません。」

なのは「あつ、起こしちゃった？ごめんね、らんぼつで。けが、痛くない？」

ユーノ「けがは平気です。もう、ほとんど治っているから。」

そういうと、フェレット君は包帯をとった。

なのは「ほんとうだ。けがの跡が、もうほとんど消えてる。すごい。」

すごく驚いた。酷いけがが、もう治っている。

ユーノ「助けてくれたおかげで、残った魔力を治療に回せました。」

なのは「よく、分かんないけど、そうなんだ……。ねえ、自己紹介していい？」

ユーノ「あつ、うん。」

よかった。私は思った。

なのは「私、高町なのは。小学校3年生。家族とか、仲良しの友達は『なのは』って呼ぶよ。」

ユーノ「僕は、ユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから……。ユーノが名前です。」

なのは「ユーノ君か。可愛い名前だね。」

ユーノ「すみません。あなたを……。なのはだよ。」なのはさんを、まきこんでしまいました。」

ユーノ君の顔が暗くなっちゃった。なんとかしなきゃ。

なのは「えつと、たぶん私平気！あつ、そうだ。ユーノ君けがしてるんだし、ここじゃあ、落ち着かないよね。私の家に行きましょう。後の事はそれから。ねっ。」

と言って私たちは移動を始めた……。その時、目の前に魔方陣が

現れて・・・

なのは「ふえ、ふえ。」

出てきたのは、なんと！気絶した男の子でした。えーっと、暗いからよく分からないけど、年は同じぐらいだと、思う。

なのは「どっ、どうしよ。」

ユーノ「とりあえず、なのはさんのお家に知らせましょう。でも、どうして魔方陣が・・・。魔法技術は無いはずなのに。」

なのは「わかったけど・・・他に何か言った？」

ユーノ「いいえ、何も。」

なのは「そう？なら、行かなきゃ。」

そうして、私は行こうとしましたが、男の子から羽の形のブローチと、宇宙みたいに深い黒のクリスタルのキーホルダーが落ちたのに気が付きました。そして、思わず拾いました。

ユーノ「どうしました？なのはさん。」

なのは「え？ううん、何でもない。それより、早く行かなきゃ！」
私はそうごまかしましたが、急がなきゃいけないのは事実だから、嘘ではありません。それに、ユーノ君も何か隠してるみたいだし。

なのは side・OFF

恭也 s i d e

なのは「ただいま〜！」

なのはが帰ってきたようだが、今日は叱らないといけない。

恭也「なのは〜。こんな時間にどこに行つて〜「お兄ちゃん、たいへん！男の子が公園で、倒れてるの！」っなに〜！本当か！父さ〜ん！緊急事態だから、少し公園に行つてくる！」
なのはがめずらしく、人の話に割り込んだのにも驚いたが、それよりも、話の内容に驚いた。

士郎「わかった！母さん、救急車だ！」

こついう時は、この夫婦の連携が頼りになる。

桃子「わかったわ。美由希は恭也と一緒に行って！」

母さんの対応もやはり、早い。

美由希「わかった。」

美由希も、かなり早い。ここは、俺も。

恭也「なら早く行くぞ、美由希！なのはも、案内してくれ。」

なのは「う、うん〜！」

恭也 s i d e ・ O F F

カ イ s i d e

周りが暗い。どうやら無事だったらしい。「？*+〜・@」何か聞こえるが、体が動かない。そして、俺はそのまま、意識を手放した。

カ
イ
s
i
d
e
・
O
F
F

第1話 発見（後書き）

みりん「第1話でしたー。どうでしたか、1話は？ぜひ感想をお寄せ下さい。」

なのは「次回、『遭遇』お楽しみに〜。」

お知らせ

すみません。学校の勉強や英検の勉強などが忙しくて、なかなか執筆活動をする暇がありません。次の投

稿がいつになるかまだ分かりませんが暇ができ次第、執筆を続けて行きますので、末永く見守り下さい。

一応、7月の半ばごろには投稿できると思っていますので、それまで待つて頂ければ幸いです。始まって早々

にこんな事が起こってしまい、誠にお詫びを申し上げます。なお、同じような事が定期的に起こってしま

うのですが、それはあらかじめご了承ください。

第2話 遭遇（前書き）

久しぶりです。とりあえず、本編を始めましょう。

「魔法少女リリカルなのは *anger*」スタート！

第2話 遭遇

ハク s i d e

私は今、う〜ん。どこに居るんだろう？気づいたら暗い部屋の中にいるし、明かりと言えば月明かりぐらいだし……。ん？何か、下がふかふかしてる。じゃなくて！何でこんなところに……。えーつと、思い出してみよう。

(魔方阵が展開される音) キンッ

ハク「あいたたた〜。つて、ここどこ？」

私は見たこともない場所にいた。周りにはコンクリートで出来た建物、たくさんある。

「つて、よく思ったら痛い！え〜と、何々。転送時の魔力干渉で、体内の各所に異常が発生してる。一回、スリープモードに入る必要があるんだけど、そういう訳にはいかないなあ。」

私は少しでも移動する事にした。せめて、どういう所か把握しておく必要があるからだ。

「でも、どこに行けばいいんだろう。とりあえず歩いてみるか〜。そして、私は歩きだした。」

しばらくして、私は本がたくさん置いてある所に着いた。いわゆる、図書館だろう。私は入ってみた。

「えーっと、歴史書とかかなあ。あつ、あつた！なにになに。ここは地球って星の日本の海鳴市って所かあ。へ〜。まあ、いいや。移動しよ〜っと。」

そして、私は図書館を出た。とりあえず、適当に歩いてみる。その時、何か青い宝石っぽい物を見つけた。

「何だろ〜、これ。キレイな青だな〜。まっ、良いか！とりあえず、拾ってこ。」

その後、色々歩いて私は都市部に出た。辺りはもう暗く、人通りも少ない。気付かなかったが、海鳴に来たのが夕方頃だったらしい・・。

「う〜ん、だめだ。そろそろ眠くなってきた。それに、体中がズキズキする。そろそろ限界か〜」
私は途中で意識を手放した。

って感じだったと思うんだけどなあ。な〜んで、こんな所に居るの？分からないなあ。

(ドアのノックの音) トントン

「誰？」私は一応警戒する。魔法は、ほとんど使えるまで回復している。私がバインドの準備をした時

(ドアが開く音) カタン

ドアが開いた。そして、それと同時に私は「バインドッ！」

とバインドをかけた。

ハク s i d e O U T

フェイトside

私は今、寝室の前にいる。なぜなら今日偶然、ジュエルシードを持った人を保護したから。そして事情を聴いて回収出来たら回収するつもり。じゃあ、入ろう。

フェイト「こんばんは「バインドツ！」ええっ！」
何でだろう。まだ何もしてないのに。

ハク「悪いけど、おとなしくしてね。あと、詳しい状況を教えてもらおうか。」

フェイト「え〜っと、まずここは私の家で、細い路地で倒れてたから、とりあえず運んできたんだけど・・・。」
分かってもらえたかなあ。何か微妙そうな顔をして・・・ない!?

ハク「あつ、そうなの?ありがと〜!」

何か急にフレンドリーになった。でも、その前に・・・

フェイト「え〜っと、このバインドを外して貰えないかなあ。」

ハク「あつ、ごめ〜ん。忘れてた。」

何で・・・!? 酷くない? って、それよりも

フェイト「ねえ、ジュエルシード持ってない?」

いや、持っているはずなんだけど一応聞いてみる。

ハク「じゅえるしいど?」

え? ええ〜!〜!〜!〜! ちよつと待って、

フェイト「ねえ、本当に!? 青い宝石なんだけど。持ってない?」

持ってなかったら、困る。

ハク「ああ、これ？てゆうか、これなーに？」
え、知らないの！？いや、慎重に慎重に。」

フェイト「ジュエルシードっていうのは簡単に言つと、昔作られた、中に魔力が詰まっている危険な物で、発動しちゃうと次元震が起きちゃうの。」
どうなるかなあ。

ハク「へえ〜。で、そんな危険な物をどうするわけ？まさか悪用するなんてことはないよね？もし悪用するんなら、これは渡さない。絶対に。」
何？急に真面目な顔になった。でも、どうしよう。話そうか話すまいか。でも話さないと話してくれそうにないし……。話しちゃおうか。

フェイト「えっと、私もよくは分からないけど、母さんの研究のために必要なんだって。だから、それは回収しないとイケない。母さんのために。」
あっ。つい言い過ぎちゃった。どうしよう。

ハク「そうなんだ……。じゃあ、あげるけど悪用しないでね。」
う〜ん。約束はできないけど、
フェイト「わかった。気を付ける。」
ふう、よかった。色々あったけど、今日は寝よう。

フェイトside OUT

カイ「うーん、よく寝た。って、ここ病院か！ハクはどうした？ゼロもインフも無い。いったいどうして・・・。」
とりあえずわかるのは、俺が今病院にいるってことぐらいだ。もう少し何か分からないかなあ。

なのは「もしもーし。入りますよ。」
ん？誰か来たぞ。こいつは重要だ。とりあえず、話を聴こう。

カイ「ああ。」

なのは「あつ、起きたんですね！良かった。」
俺は、気絶してたのか。じゃあ、途中ではくれたんだな。

「あのお。私、高町なのはです。なのはって呼んでください。あなたの名前を聴いてもいいですか？」
まあ、いいか。名前ぐらい教えても。

カイ「ああ。俺は、カマイス・アンダーだ。カイって呼んでくれ。」

これが、いづれ俺の人生を変える人間、『高町なのは』とのあいだだった。

第2話 遭遇（後書き）

あとがきです。

今回は、注意書きだけにします。会話文で、情景描写をほとんど同じ人物が話す場合は、「」の前の名前を省略します。すみません。

では次回「喫茶『翠屋』」お楽しみに。

第3話 喫茶『翠屋』 8/13に大幅に書き直しました。(前書き)

起きたら病院、デバイスの発見、そして『翠屋』への誘い……。

「魔法少女リリカルなのはangle」始めよう

第3話 喫茶『翠屋』 8 / 13 に大幅に書き直しました。

カイside

俺は今、病院に居る。おそらく、病院そして前に居る少女『高町なのは』と簡単に自己紹介をしたところだ。

カイ「そういえば、俺が倒れていた辺りに羽の形のブローチと黒いクリスタルの形のキーホルダーが落ちてなかったか？なのは。」
それらは俺の大切な相棒のゼロとインフだ。まあ、ハクは大丈夫だろう。脳味噌あるし、動けるし。その内見つかるだろ。

なのは「え〜っと、たぶんこれだと思っただけど……。」

そう言っただけなのはがとりだしたのは、

カイ「おう！それだ、それ。ああ〜よかった。っと、すまん。いきなり大きな声を出しちゃって。」
いや、本当にすまないと思っている。ただ、ついつい嬉しくて。

なのは「いえ、大丈夫です。それより、そんなに大切な物何ですか？それ。」

そうか、普通聴くよな。いきなりキャラが変わったら。たまに有るんだよな。拾ってくれた人の前ではしゃぐこと。

カイ「ああ。これは、親の形見なんだ。俺の父親が俺に唯一、残してくれた……。」

嘘は言っただけだ。これは本当のことだ。俺の両親は本当に死んでい

る。

なのは「ごめんなさい。悪い事聞いちゃいましたか？」

あ、やばい。なんか悪いことをしたらしい。なのはの雰囲気が悪い。つて言うか、落ち込んでる。

カイ「いや、そんなことは無い。それより、敬語はやめてくれ。タメ口じゃなきゃこつちが話しにくい。」

どうだろうか。なのはとしては何か迷ってるっぽいぞ。でも、話しにくいのは困るし。

なのは「はい、わかりました。努力します。」

あ・れ？おつかしいなー。伝わって無かったか？

カイ「いきなり敬語使ってるぞ、なのは。あと、厚かましい事を承知で頼むんだが、今夜お前の家に泊めてくれないか？無理ならいいんだが。」

正直に言うとお泊めて欲しい。でも、相手が無理ならしょうがない。なのはの反応を見ると、少し戸惑ったように顔を俯けていた。さすがに駄目だったか。

「すまない。駄目だったみたいだな。無理を言っすすまなかった。」
するとなのはは気まずそうに口を開く。

なのは「えっ・・・あつ、ごめんね。私としては駄目ではないんだけど、お父さんが何て言うか分からなくて。一応聴いてはみるけど、家のお父さんは前に大怪我をして。それで今は喫茶店のマスターをしてるんだけど。それにカイ君は体格的に中学生ぐらいでしょ。」

それでお父さんが何て言うか。」

カイ「いや、無理ならいいんだ。迷惑をかける頼みごとではあるし。初対面の相手に言うべきでは無かったな。すまない。」
とは言ったものの、俺にはこの星に知り合いなんていない。野宿はほぼ確実だろう。

なのは「あつ、いえ。でもカイ君には住む場所が無いんでしょ。いきなり現れた事は、どうにか誤魔化して説明すれば、分かってくれるかも。電話して聴いてみるね。」
と言って、なのはは電話をかける。そして、待つ事10分。

「本当！！ありがとう、お父さん！それじゃあ、また後で。」

なのはは嬉しそうに電話を切る。そして、口を開く。

「一応、大丈夫って言うてくれたよ！でも、条件があつて、『私、高町なのはに手を出さないこと。』『仕事は徐々に覚えていけばいいから、喫茶店の手伝いをする。』『暇な時は家事の手伝いをする。』の3つだつて。守れる？守ってくれば、カイ君が居たい時までいて良いって。」

カイ「ああ。それだけで泊めてくれるなら喜んで。でも、本当にいいのか？居たい時まで居ていいっていうのは。」
条件が条件だけに、少し気まずい。本当なのか、確認を取ってみる。

なのは「うん。お父さんが良いって言ったから。それに、困っている人は助けなきゃ。」

どうやら良いらしい。しかし、なのはが優しくて良かった。

カイ「すまないな、ありがとう。じゃあ、また後で。」

するとなのは少し頬を赤く染めて、
なのは「うん。後で、駅前の喫茶店『翠屋』に来てね。」
と言って、病室を出た。

カイ side OUT

なのは side

私、高町なのはは自分でも分かるくらい、うきうきしていました。
原因は分からないけどとにかく、うきうきしていました。あ、そう
だ。カイ君の事を言わないと。

(携帯の音)ピロロロロ

なのは「もしもし。あつ、お父さん？カイ君は、『それだけで良
いなら喜んで』って言ったよ。」

すると、お父さんは微妙な感じの声で、
士郎「本来なら駄目なのかもしれんが、泊る所が無いならしょうが
ないな。」
と言ってくれました。私はここで、少し疑問に思った事を聞いてみ
る事にしました。

なのは「でも、お父さんは、本当に良かったの？」

すると、お父さんは当然の事を言うような口調で
士郎「困っていたんだから、助けてあげるべきだろう？それに、な

のはにあんなに一生懸命説得されたら、良いと言わざるを得ないよ。
「
と言いました。私は意外な答えと一緒に聞こえてきた答えが気にな
って、思わず

なのは「ふえ？私、そんなに一生懸命だったの？」
と聴き返してしまいました。お父さんは

士郎「ああ、とても。まるで好きな男の子の事をかばうみたいに。」
突然の事に驚いて、私は電話を切ってしまいました。そして、そこ
にあった鏡で自分の顔を見ると、頬が少し赤かったので私は余計に
恥ずかしくなっていました。

なのはsideOUT

／／／4時間後／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／

カイside

俺は今、言われたとおり『翠屋』の前に居る。入りたいが、雰囲気
的に入りづらい。結構な賑わい方だ。でも、いつまでもお店の前に
居る訳にはいかないし、入ってみよう。口調は変えるか。フレンド
リーな感じに。

カイ「すみませ〜ん、こんにちは〜。」

誰か出てきてくれ。入ったとたん、周りの好奇心だらけの視線が痛い。

桃子「いらっしやいませ。カウンター席でよろしいでしょうか？」
えーっと、とりあえず声をかけてみよう。

カイ「あの、すみません。僕は今日から高町さんの御宅でお世話になる、カイと言う者なんですが。」

桃子「ああ！あなたがカイ君ね！私は高町桃子っていうの。話は聞いているわ。とりあえずこのエプロンを着けてくれるかしら。」
よかった。優しそうな人が出てきてくれた。土郎さんの奥さんかな？若そうな方だな。それは置いといて、まずは着けてみるか。

カイ「こんな感じですか？」

桃子「はい、そうです。じゃあ、いきなりで悪いけどカイ君にはウエイトレスをやってもらおうかしら。」
少しハードルが高い気はするが、ここは承諾してしまおう。

カイ「分かりました。頑張ります。」

そして桃子さんから、注文されたケーキを受け取って働き始めようと思っていた矢先、ドアが開いた。入ってきたのは、なのはだった。なのはは俺を見るとすべて分かったのか、「がんばってね。」とだけ言い、『翠屋』を出た。その後、俺はウエイトレスをやったが、どのくらいやったのかは覚えておらず、覚えているのはウエイトレスが俺にとって、過酷な役職であった事ぐらいだった。

第3話 喫茶『翠屋』 8/13に大幅に書き直しました。(後書き)

みりん「1か月ぶりの、みりんです。実は昨日・・・strike
rsを見て泣いてました。いや、あれは泣けた。」

カイ「俺はまだ知らん。」

みりん「かわいそ。ところで、何で話し方がフレンドリーじゃないの？」

カイ「必要無いと思ったからだ。」

みりん「作者なのに！？ガビン。しくしくしく(泣)」

カイ「ヘタレは放っておいて。次回は僕の紹介、その次は本編に戻るよ。期待してね。」

みりん「何で勝手に言っつてうるさいぞー！」「じゃあー！」

キャラクター紹介？（ネタバレ注意）

8 / 13 にあとがきを少々付け加えま

書きましたが、ネタバレ注意です。

キャラクター紹介？（ネタバレ注意）

8 / 13 にあとがきを少々付け加えま

カマイス・アンダー

容姿・・・皆さんのご想像にお任せします。皆さんの頭の中で、皆さんだけのカイを想像して下さい。そして、思いついたら感想欄に書いていただくと嬉しいです。気に入った案があれば採用します。すみません。思いつかなかっただけです。本当に申し訳ございません。

好きな物 事・・・甘いもの（特にチョコレート）・素直な性格の人・小さい子の世話

嫌いな物 事・・・苦いもの・気難しい人・空気が読めない人・裏切り・主従関係

使用デバイス・・・ゼロ・インフ・ハク（融合機）

希少スキル・・・

一予知夢《predictive dream》

（最短で起床直後、最長で半年後までの未来が夢で見れる。しかし、いつでも見れるという訳ではなく、何か大きなきっかけがあった時のみ、きっかけを与えた人物の、周辺で起こる事になる未来を夢で見れる。）

テクニックコピー

(一度見た相手の技をその場でコピーする。しかし、カイが使う魔法の系統の物で無いと使用できない。)

魔力変換資質(炎・風)

魔力色・・・黒

バリアジャケット・・・

真っ白のTシャツの上に黒い半袖のジャケットを羽織った、シンプルなタイプ。しかし、背中に小さめの羽が付く。

デバイス・・・

ゼロの方は『ロックマンゼロ』のZセイバーとバルディッシュのザンバーフォームを足して2で割った感じだと思ってもらって構いません。

インフの方は『新機動戦記ガンダムW』のウイングゼロ(EW版)のバスターライフルを想像していただければ結構です。どちらも分からない場合はすみません。

使用技・・・ウインドシューター

(発射するのは通常の魔力弾だが周囲を魔力変換した風で包んでいく。そのため、普通の魔力弾よりも速度が速い。数は4つ。)

ストームブレイカ

(基本的にはなのはのディバインバスターと何も変わらないが、三分の一が風で出来ており、当たったらしばらく風の影響で身動きが

とりずらくなる。カイの判断で炎で周囲を包む事もある。）

ドラゴンブレスブレイカ

（名前の通り炎を乗せた、龍の息吹のような風でブレイカ 本体の周りを包む集束魔法。ただし、集められるのは自分の魔力のみ。）

ネットバインド

（魔力を網状にして相手を縛りあげるバインド。捕まると解除しない限りは身動きが取れないというややこしいバインド。）

クロスプロテクション

（2つのデバイスを使ったプロテクション。防御力は普通よりも高いが、ただそれだけ。）

用語解説集

エンジェルデバイス・・・

2つのデバイスを同時使用するために作られた2種類のデバイスのうちの方割れ。しかし同時使用するためには、2つのデバイスのコアを同調させる必要がある、そのためコアが補助型と同じ構造。したがって、必然的にA Iは気があう。タイプは何種類があるが、組み合わせは決まっている。しかし、使用者登録をしなくてもいいという利点を持つ。ゆえに、勝手に使用されやすい。エンジェルデバイスとその補助型には『ダブルコアシステム』というシステムが導入されており、特殊な技術で、一つのデバイスに2つのコアを入れており、それによりスムーズな武器の分割・合体が可能となった。また、2つのうちの1つが破壊されても使用には支障が無い。しかしその後、カイがいた国のデバイスマスターに修理をしてもらわな

ければならない。全損でなければ1つだけならカイでも修理はできる。

セットアップクロス・・・

エンジェルデバイスとその補助デバイスを同時に使用する方法。セットアップ時に「セットアップ・クロス」と叫ぶか、2つのデバイスをこすり合わせるかどちらかのアクションを取る必要がある。

ハクイム

容姿・・・カイと同じ感じをお願いします。

好きな物 事・・・遊ぶ事・『翠屋』のケーキ・何もすることが無い時間・フレンドリーな人

嫌いな物 事・・・働く事・騙す人・空気が読めない人・ぶっきらぼうな人・騒がしい所

希少スキル・・・魔力変換資質（水・雷）

使用技・・・サポート系魔法各種（基本的に何のサポートもできる。）

ノーマルシューター（名前の通り、何の変哲もないただのシューター。数は6つ。）

マジックスタンガン（半分を弱い電流に変換した魔力弾をスタンガンのように使う。）

キャラクター紹介？（ネタバレ注意）

8 / 13 にあとがきを少々付け加えま

みりん「カイが強すぎるのではないかと思っただ方もいると思いますが、カイのデバイスには他の機能は追加せずに、元々の性能のみで戦っていく方針でいます。と言っても後々（A・S編に）新たな形態も出ます。しかしそれは、あまり使えない感じにしていくので安心ください。次回は本編に戻ります。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4418t/>

魔法少女リリカルなのは-angel

2011年10月9日03時50分発行